

工藤量導

OP/仙風  
カサカ

微

風

吹

動

自分らしさをまとう

季節が耳打ちする  
 「似合わない服を脱げ」と  
 きつと君は気づいてた  
 目的を通り過ぎたと

(折坂悠太「坂道」より)

十数年前、たまたまつけたテレビ番組に二人の女子大学生が取りあげられていた。テーマはファッショントークで、片方はゴシック・アンド・ロリータ（ゴスロリ系）の、黒を基調とするヨーロッパ風のレスやフリル、リボンで飾られた華美な洋服を着こみ、性格はやや内気で、なんだかあまり自信がなさそう。もう一方はコンサバティブな服装（コンサバ系）の、いつの時代でも受け入れられやすい清潔感あふれる格好をして、社交的でズバズバと意見を言う、クラスにいたら中心的な存在だろう。同じ大学内にいても自然には親しくならなそうな対照的な二人。それを引き合わせることによる化学反応を期待する、そんな番組趣旨だったと思う。

結果は、コンサバ系の女性がTPOにふさわしいファッショントークの社会的な優位性を熱弁し、それをゴスロリ系の女性が譲れない気持ちはありながらもすごすごと受け入れる、一方的な寄り切りだった。多少なりとも互いの主張を受け入れ合うという展開を予想した自分としては、思ひがけない圧勝劇に、多数派の強さという社会のリアルを見せつけられた気がして、突然としないモヤモヤ感を抱いてテレビを消した。誰かの感想や同調を求めようにも、ツイッターなどのSNSもまだ盛んでなかつた頃のことだ。

今年読んだ漫画の中でもつとも気に入っている作品に『着たい服

がある』（常喜寢太郎作）がある。あらすじは、ロリータファッショ  
ンに憧れる女子大学生のマミは周りの目を気にする臆病な性格で、  
せつかく購入したロリータ服も、外に着てゆくことはおろか、誰にも言  
えない秘密になっていた。そんな折、堂々と奇抜なファッショ  
ンで身を包むバイト先の同僚の姿に感化されて、少しずつ自分の本  
当のあり様を周囲に解放してゆく物語である。

とりわけ心を打たれたのはこんな場面だ。マミの趣味を知るが、  
どうしても理解できない母親は大きなショックを受けて家出する。  
傷心のマミは偶然出会ったロリータ服を颯爽とまとう先輩に「服を  
バカにされるのは自分自身をバカにされているのと一緒ですか  
ね？」と尋ねる。ところが逆に「服に『自分らしさ』を委ねてたら、  
いつか脱ぐのが怖くなっちゃうよ？」と問い合わせてしまう。

数日後ようやく戻ってきた母親は、一緒に好きな服を買いに行こ  
うと提案し、マミの気持ちを理解するために勇気を出して自分もロ  
リータ服を試着してみる。ところが試着室の鏡に映る自身の姿は想  
像以上に似合っておらず、情けなくて思わず涙がこぼれてしまう。  
察したマミは試着室の仕切りを開け、思いを伝える。

「私は私。お母さんはお母さん。好きなものは同じじゃない…。  
それぞれ…違う、ひとりの人間なんだよね。だからお願ひ…。

これまでの二〇年間私を愛してくれたように…この服のことは  
わからないまま…私を…愛してほしい…」

母親は「あたり前じゃない…」とうなずき、一緒にロリータ服姿  
のまま記念写真を撮る、という場面である。

その時、マミが着ていた服はなんだか質量が格段に軽くなつたみ  
たいで、服を着ながらにして、何かの重みをドサつと脱ぎ落したよ  
うに見えた。服に私らしさの象徴としてアイデンティティを投影す  
るのでなく、服と私を切り分け、「『私には』着たい服がある！」と、  
ようやく自分の好きと向き合うことができたのだ。マミはロリータ  
服を着ていない時も、自分らしさをまとつた今まで共に生きゆくす  
べを、その足がかりを得たのだと思う。

冒頭にふれたゴスロリ系の彼女は、今はもう同じファッショニ  
していないかもしれない。好きであり続けること、変わらないでい  
ることは奇跡のようなものだから。それでも時には、衣服の替え時  
を言づてする季節の微風が、好きでたまらなかつた自慢の服をまと  
い歩いたあの頃の肌触りや匂いを思い起こさせ、偏愛してもらつた  
服たちの感謝の気持ちをそつと耳打ちしてくれているのではない  
か。そんな楽観的な想像をしてみて、ようやく自分の中でもすぶり  
淀んでいたモヤモヤ感に風を通すことができた気がするのだ。